

として知られる歴史家であるが、近代教育史に新たな意欲をもって立向われた。その成果が、手堅い実証にもとづく厳密な史料操作となつてあらわれ、本書の価値をいっそう高いものにしてゐる。

大阪府教育百年史は全三巻の予定とどき、本文(叙述)篇と史料篇(2)の完成を期待して紹介にかえる次第である。

(A5判 一二六六頁 写真八頁 目次四七頁 昭和四十六年三月 大阪府教育委員会)
(酒井 一・龍谷大学助教授)

G・バラクラフ著
中村英勝・中村妙子訳

現代史序説

現代について断片的に語ることはたやすい。だが現代史に総合的な見取図を与えることは難しい。世界史が新たな段階を迎えたことは誰の目にも明らかである今日、その野心的な試みたる本書の邦訳はまことに時宜を得ている。慧眼のオックスフォード中史家の手になる原著は、一九六四年の執筆であり、以後七年間世界の激動は凡

庸の現代史分析の焦点を曇らせるに足るものがある。にもかかわらず本書における分析は今日なお基本的には光を失つておらず、むしろ執筆当時より一層の説得力を持ちうるようにさえ思われる。しかも本訳書に特に寄せられた長い序文(七一年四月付)は、この間のギャップを十二分に埋め、訳書の光彩を原著以上に高めている。著者の現代史に対する認識視座の特色は何よりもそのグローバルな視角にある。一九世紀ヨーロッパの国民国家を単位とした勢力均衡の時代から地球規模での真の世界史への座標転換、国際政治、人口エネルギー両面における西欧の比重低下とA・A諸国の抬頭、米中ソを中心としたブロック化と大陸規模での世界的再調整期の開幕という認識は西欧人としての制約を見事に脱している。著者は従来のヨーロッパ中心の世界史像に根本的な修正を迫り、同時に一九世紀以来、今尚根強く残る悪しき歴史主義に対する方法論的挑戦をも意図している。歴史における継続面より断絶面に目をむけ、現在と未来への展望から過去を把え返し、現代史に単なる政治評論を超えた学的認識を獲得せしめようとすると試みは「現代」をルネッサ

ンス以降一九世紀末葉までのいわゆる「近代」とまったく世界構造を異にする新しい史的時Ⅱ空であると規定する。彼はこの構造転換をもたらした原動力を一九世紀末葉以降の第二次産業革命(科学技術革命)にもとめ、その生み出した高度工業社会の帝国主義的世界制覇の進行とその解体過程という一円環の中に世界構造の一大過渡期を見る。つまり一八九〇年の前後から一九六〇年あたりまでを近代と現代の間に横たわる分水嶺と見、ドル時代の終焉以後の世界を新たな時代、政治的多極化と南北問題(著者はこの用語を用いてはいない)の時代であると把握する。この構図は大局的な文明史観としては誤っていない。ただ難を言えば、この七〇年もの大きな分水嶺に生起した諸々の歴史事象の意味が全て国際政治論に還元され、キメの細かい段階規定が欠落していることは否めない。第二次産業革命は進行中の第三次産業革命との構造的連関を問われるべきだし、帝国主義と南北問題も産業資本主義↓独占資本主義↓国家独占資本主義と社会主義との競合という経済学的段階分析を踏まえねばなるまい。またマルクス主義理解の不十分さは一九一七

年の意味に固執する読者から単なる近代化論の一変種にすぎぬという謗りを受ける恐れが多分にある。或る意味では本書も類書の陥りがちな大味さを免れてはいない。とはいえ本書の意図するところは現代史の基本的構図を提出することであり、ひいては著者が現在執筆中の二十世紀世界史の理論的前提を明らかにするところにある。その限りでは本書は所期の目的を十分果しているといえよう。なかんずく日本語版序文における米ソ両極体制の終焉と米中関係に関する分析はまことに示唆的であり、バラクラフの面目躍如たるものがある。また「イーデンの回顧録よりもエンクルマの自伝に」現代史研究のより有効な手がかりを見ようという新しい方法的価値基準の提起を、日本の西洋現代史研究者はどのように受けとめるべきであろうか。いずれにせよポレミッシュな書ではある。

(B6判 四一七頁 昭和四六年七月 岩波書店刊 定価七五〇円)

(谷川 稔・京都大学大学院生)

